都城市文化財調査報告書　第75集

mukoubaru 2 SITE

向原第２遺跡 －第２次調査－

民間開発―遊技場建設―に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

向原第２遺跡（東方から市街地方向を望む）

2006年10月

宮崎県都城市教育委員会

例　言

1　本書は株式会社親和商事が計画した遊技場建設に伴い、発掘調査した向原第２遺跡（第２次調査）の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は都城市教育委員会が主体となって行ない、同文化財課主事　加覧淳一が担当した。
3　本書に使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は座標北である。
4　本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
5　土層と遺物の色調は『新版標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
6　現場における遺構の実測は作業員の協力を得て加覧が中心となってこれを行ない、都城市教育委員会文化財課主事栗山葉子、同嘱託外山亜希子、津曲千賀子の協力を得た。遺構実測図の製図はすべて加覧が行なった。
7　本書に掲載した遺物は整理作業員、加覧が実測し、製図は加覧が行なった。
8　遺構・遺物の写真撮影は加覧が行ない、空中写真撮影については九州航空株式会社に委託した。
9　竪穴住居出土炭化材の放射性炭素同位体年代測定分析については株式会社古環境研究所へ委託した。
10　本書の執筆・編集は加覧が行なった。
11　発掘調査で出土した遺物とすべての記録（写真・図面等）は都城市教育委員会で保管している。

目　次

本文目次

第１章　はじめに
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査体制……1
第２章　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境……2
　2　向原第２遺跡と周辺の遺跡……2
第３章　調査の成果
　1　発掘調査の方法と概要……4
　2　向原第２遺跡の基本土層……6
　3　遺構と遺物……8
　4　包含層出土遺物……14
第４章　自然科学分析……18
第５章　まとめ……20

挿図目次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　向原第２遺跡トレンチ配置図……4
第３図　向原第２遺跡土層横断面図……5
第４図　向原第２遺跡遺構配置図……6
第５図　ＳＡ１実測図……7
第６図　ＳＡ１炭化材検出状況実測図……8
第７図　ＳＡ１出土遺物　土器（1）……9
第８図　ＳＡ１出土遺物　土器（2）……10
第９図　ＳＡ１出土遺物　石器（1）・鉄片…11
第10図　ＳＡ１出土遺物　石器（2）……12
第11図　ＳＡ１出土遺物　石器（3）……13
第12図　土坑実測図……14
第13図　包含層出土遺物……15

表目次

第１表　向原第２遺跡遺物観察表（土器）…16
第２表　向原第２遺跡遺物観察表（石器）…17

図版目次

図版１……22
図版２……23

第1章　はじめに

1　調査に至る経緯

平成16年10月20日、株式会社親和商事が都城市立野町3664番地外に計画している遊技場の建設に伴う埋蔵文化財の有無照会が都城市教育委員会になされた。計画予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地「向原遺跡（遺跡番号：4012)」範囲内に位置し、また、平成元年度調査の向原第2遺跡調査区にも隣接しており、当初から遺跡の存在が予想された。そこで当市教育委員会は事前の確認調査を平成16年11月8日から11月25日（実質調査日数5日）にかけて実施した。その結果、竪穴住居、ピット等の遺構及び土器類が多数検出され、一部削平を受けているものの弥生時代を中心とした遺跡が残存していることが明らかとなった。

確認調査後、株式会社親和商事と遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、開発予定地のうち店舗建物基礎工事により破壊を免れない面積（約600㎡）については記録保存のための発掘調査を実施し、その他簡易舗装による駐車場予定地については現状保存をすることとなった。発掘調査は平成17年度に実施し、18年度に報告書を刊行することで合意し、委託契約を締結した。発掘調査及び報告書作成にかかる経費は株式会社親和商事が負担し、経費の運用は都城市教育委員会文化財課があたった。

なお、平成元年度調査分については「第1次調査」とし、今回の調査を「第2次調査」として取り扱う。

2　調査体制

発掘調査及び報告書作成は以下の体制で行なった。

- 調査委託　株式会社　親和商事
- 調査主体　宮崎県都城市教育委員会
- 調査責任者　教育長　玉　利　　譲（平成17年6月15日から）
- 調査事務局
  - 教育部長　今　村　　昇
  - 文化財課長　有　馬　千　泳（平成17年度）
  - 高　野　隆　志（平成18年度）
  - 文化財課長補佐　新　宮　高　弘
  - 文化財課副主幹　矢　部　喜多夫
  - 文化財課事務嘱託　押　川　涼　子
- 調査担当者
  - 文化財課主事　久　松　　亮（確認調査担当）
  - 文化財課主事補　加　覧　淳　一（発掘調査担当）
- 報告書作成　文化財課主事　加　覧　淳　一
- 発掘作業従事者　岩切ユキ子、小山田福子、蒲生ミツ子、下玉利文代、立石カズ子、立山君子、津曲節子、徳丸ヒサ子、中原忠珍、抜迫清美、平山甲子郎、藤田フヂ子、二見義彦、馬籠恵子、南スミ子
- 整理作業従事者　大坪真知子、水光弘子

第２章　遺跡の位置と環境

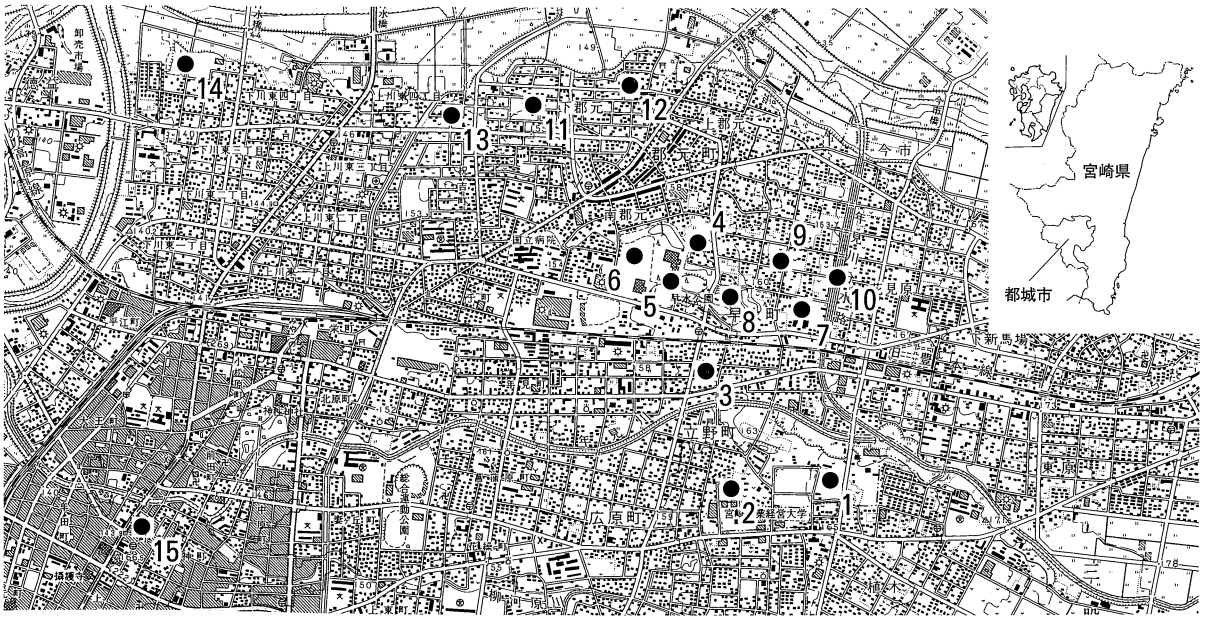
１　地理的環境

向原第２遺跡は都城市立野町字向原に所在する。都城盆地は東に鰐塚山系、西に霧島山系の山々が稜をなし、その合間から各河川が盆地中央部へと流れ込んでいる。当遺跡の北側を流れる年見川も鰐塚山系の山麓より端を発し、盆地中央の低地部で大淀川へと合流する。都城盆地の東半部は開析扇状地が発達しており、向原第２遺跡は一万城扇状地のちょうど中央に位置する。さらに細かい地形区分で見ると年見川の南段丘面に立地している。標高は約165ｍ、年見川と段丘面の比高は約５ｍである。付近の開析谷には湧水点もある。

２　向原第２遺跡と周辺の遺跡

向原第２遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地「向原遺跡（番号：4012)」に位置する。同一区域内には平成元年に大学用地造成に先立ち調査された向原第１・第２遺跡がある。向原第１遺跡では弥生時代中期後半～後期にかけての集落が検出され、向原第２遺跡（第１次調査）からは弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての集落が検出されている。今回調査したのは第１次調査地点から東へ約60ｍ離れた地点である。

向原第２遺跡周辺には当遺跡同様、年見川流域の段丘面(沖積地)に位置する年見川遺跡(３)がある。年見川遺跡では弥生時代後期の資料が検出されている。年見川を挟んで北側の沖積地には白山原遺跡（４）があり、縄文時代早期の集石遺構、遺物が見つかっている。付近には池ノ友遺跡（５)、牟田ノ



１：向原第２	２：向原第１	３：年見川	４：白山原	５：池ノ友
６：牟田ノ上	７：天神原	８：沖水古墳	９：祝吉御所跡	10：樺山・郡元
11：松原地区	12：久玉	13：祝吉	14：牧ノ原地下式横穴墓群	15：中央東部地区

第１図　遺跡位置図

上遺跡（６）、天神原遺跡（７）等があり、弥生～古墳時代、中世の集落が見つかっている。早水公園内には県指定沖水古墳（８）がある。早水公園より東方には島津氏発祥の伝承が残る祝吉御所跡（９）がある。また、北方の郡元地区においては市の区画整理事業に伴う発掘調査が昭和60年度調査の松原地区第Ⅰ・第Ⅱ遺跡（11）を皮切りに長年実施され、久玉遺跡（12）等において古代、中～近世の集落が検出されている。

【参考文献】

桒畑　光博　1990『平成元年度遺跡発掘調査報告』都城市文化財調査報告書第11集　都城市教育委員会

桒畑　光博　2000『池ノ友遺跡』都城市文化財調査報告書第49集　都城市教育委員会

都城市史編纂委員会（編）1997『都城市史　通史編　自然・原始・古代』都城市

都城市史編纂委員会（編）2005『都城市史　通史編　中世・近世』都城市

矢部　喜多夫　1989『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』都城市文化財調査報告書第7集　都城市教育委員会

矢部　喜多夫・桒畑　光博　1991『平成2年度　遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集　都城市教育委員会

横山　哲英　1993『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第23集　都城市教育委員会

横山　哲英　1997『久玉遺跡（第7・8次）』都城市文化財調査報告書第39集　都城市教育委員会

米澤　英昭　2002『白山原遺跡』都城市文化財調査報告書第57集　都城市教育委員会

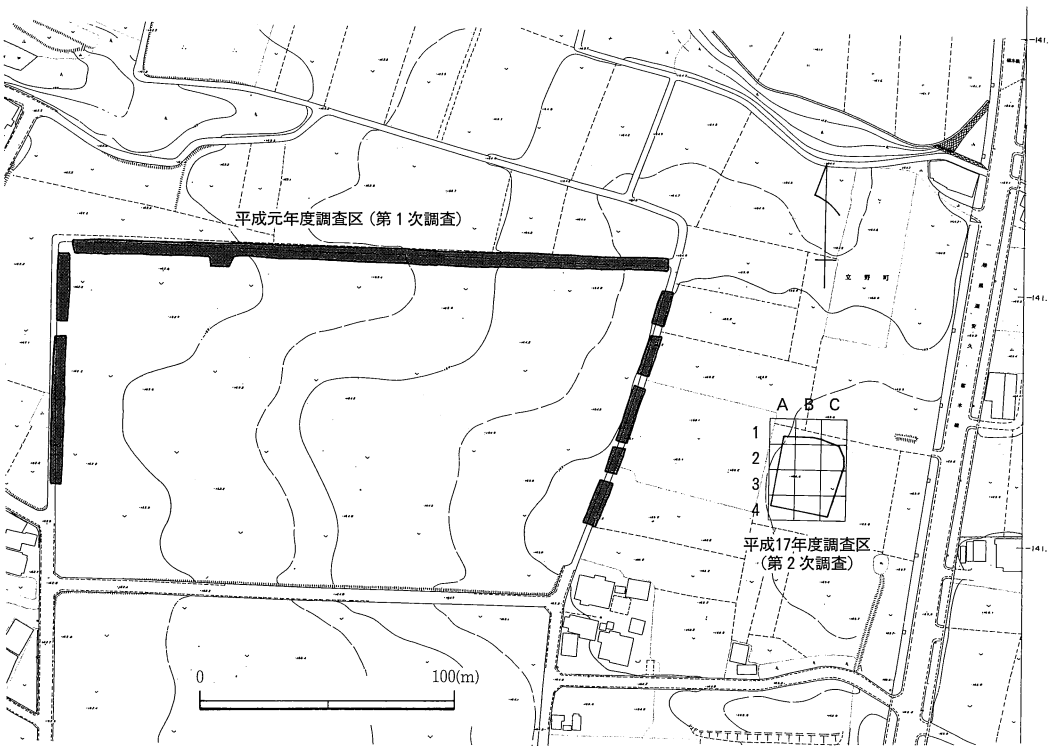
第３章　調査の成果

１　発掘調査の方法と概要

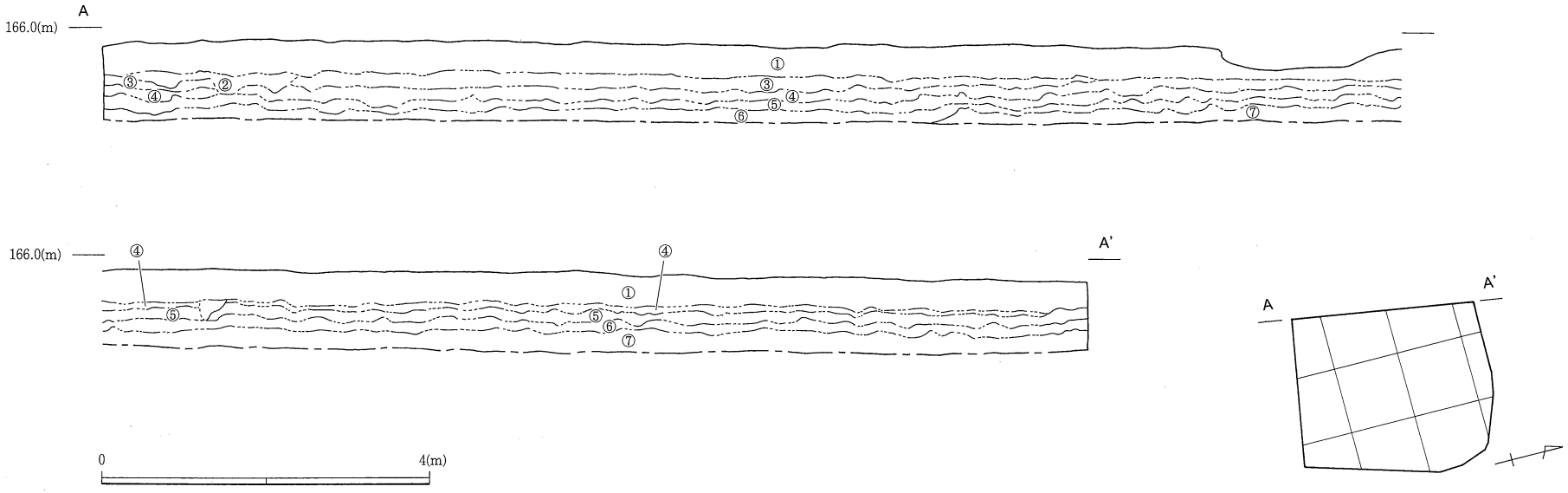
調査区の表土をバックホーで除去後、ＳＮ杭を設置し、10ｍ×10ｍのグリッドを設定した。各グリッド交点の座標は世界測地系に拠っている。設定したグリッドは北西隅から南北を10ｍ毎にＡ、Ｂ、Ｃ・・・・、東西方向を１、２、３・・・・として取扱い、各軸の組み合わせからグリッド名（例えばＢ－３区など）を呼称した。

遺構精査、掘り下げは人力によって行ない、適宜実測、写真撮影、トータルステーションによる遺物取り上げ等を行なった。調査区の現況は畑であったが、現代のゴボウ作付によるトレンチャーが南北、東西方向に表土下約１ｍまで及んでいた。その為、遺構・遺物ともに撹乱を受けているものが多かった。遺物は元位置を留めているものが多くはなかったが、トレンチャー内の遺物と選別しながら随時取り上げを行なった。なお、現場における調査期間は平成17年４月20日から平成17年６月２８日までである。

調査の結果、竪穴住居１軒、土坑３基、土器、石器、鉄片を検出した。



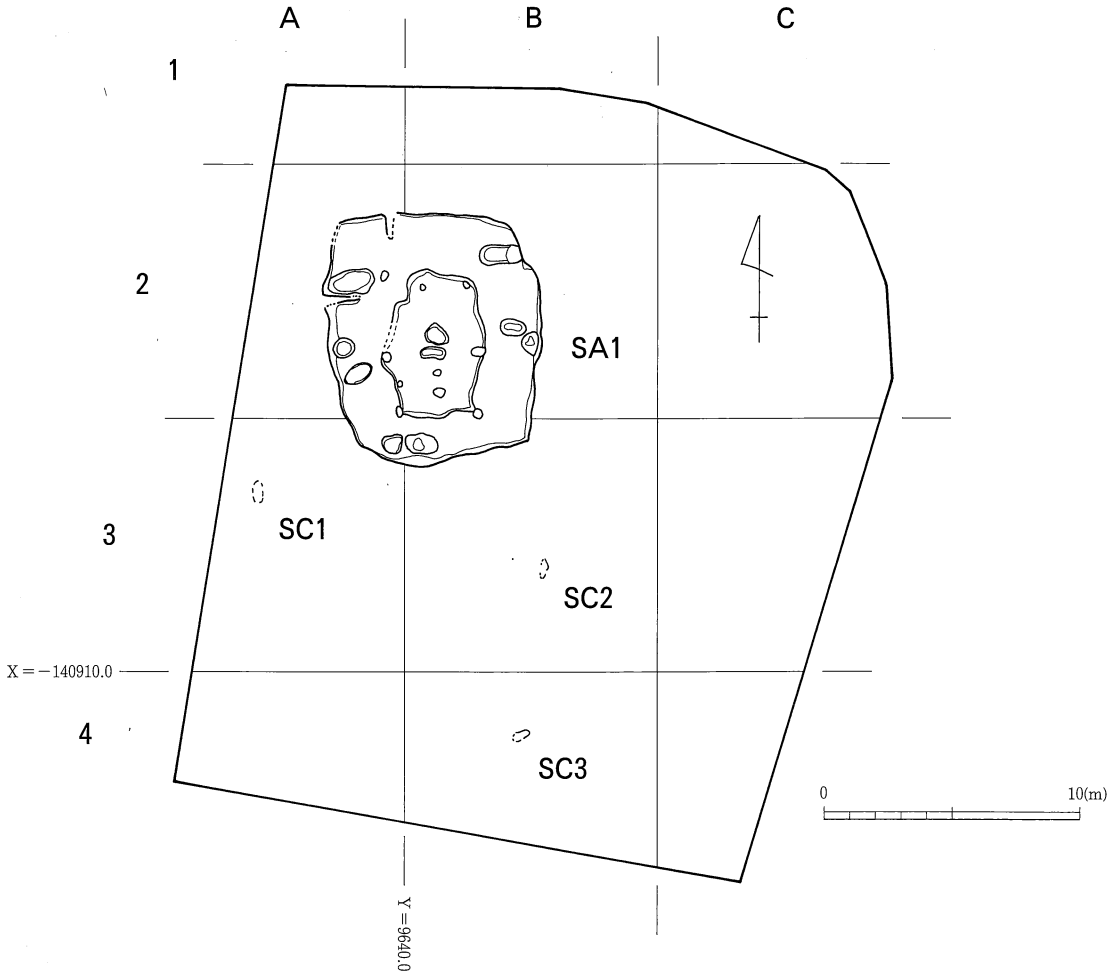
第２図　向原第２遺跡トレンチ配置図



土層説明

① …… 基本土層Ⅰ層　オリーブ黒色（5Y 3/1）砂質シルト　現耕作土
② …… 基本土層Ⅱ層　黒褐色（2.5Y 3/1）土　旧耕作土
③ …… 基本土層Ⅲ層　黒色（7.5YR 2/1）弱粘質シルト
④ …… 基本土層Ⅳ層　黒褐色（7.5YR 3/1）粘質シルト
⑤ …… 基本土層Ⅴ層　暗赤褐色（5YR 3/2）粘質シルト
⑥ …… 基本土層Ⅵ層　暗赤褐色（5YR 3/2）粘質シルト（御池軽石層への漸移層）
⑦ …… 基本土層Ⅶ層　御池軽石層

第３図　向原第２遺跡土層横断面図（S＝1/80）

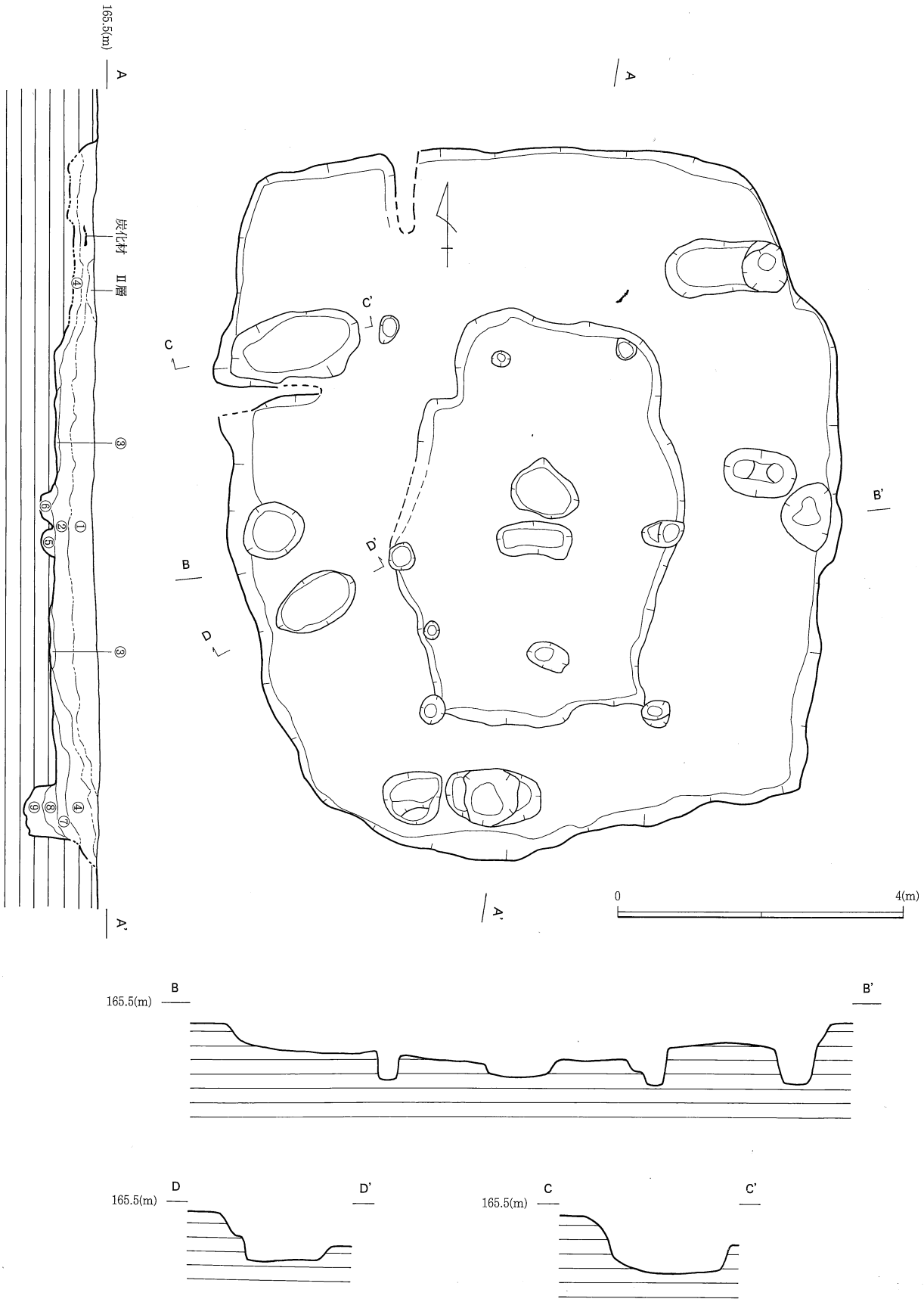


第４図　向原第２遺跡遺構配置図（Ｓ＝1／300）

2　向原第２遺跡の基本土層

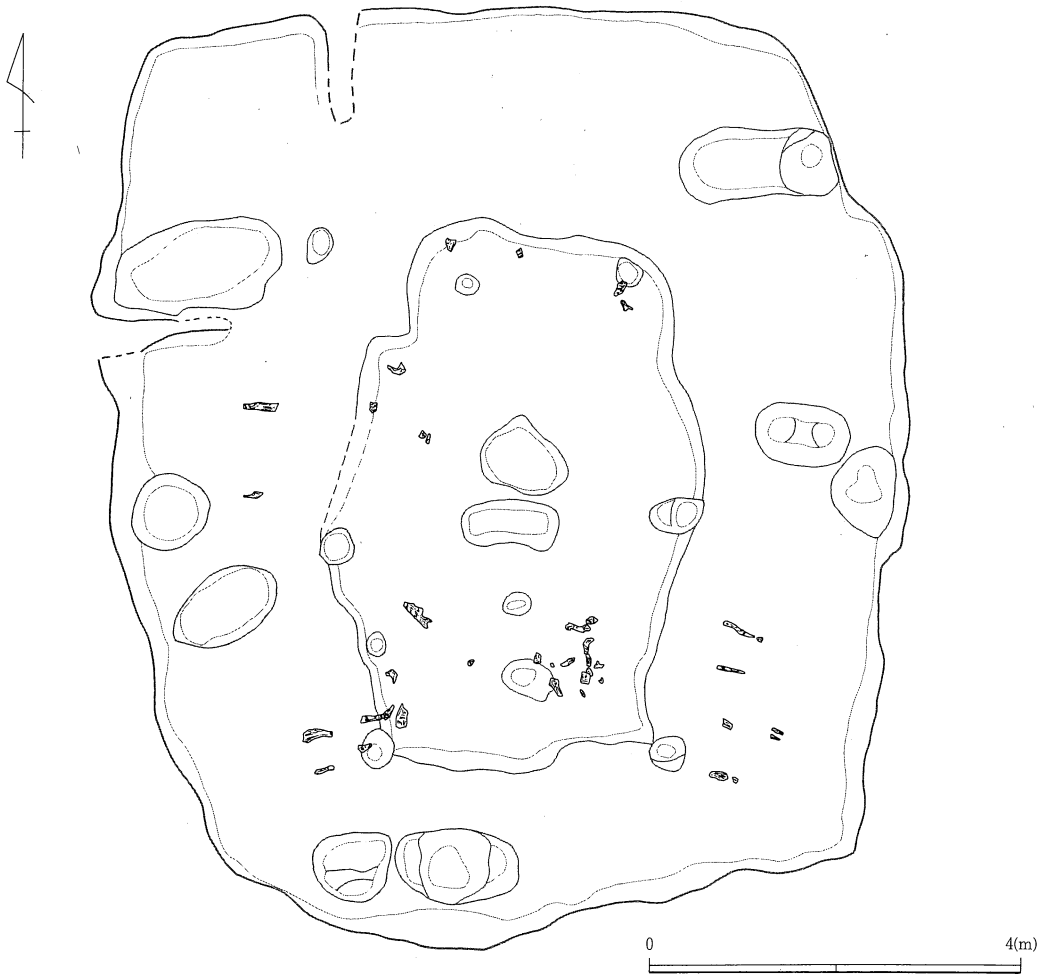
向原第２遺跡の基本土層はⅠ層がオリーブ黒色（５Ｙ　３／１）砂質シルトの現耕作土、Ⅱ層が黒褐色（２．５Ｙ　３／１）の旧耕作土、その下のⅢ層は黒色（７．５ＹＲ　２／１）の弱粘質シルトであり、御池軽石の粒を僅かに含んでいる。下層に向かうにつれ御池軽石粒の混入が多くなっていく。Ⅲ層下にはⅣ層黒褐色（７．５ＹＲ　３／１）粘質シルトが堆積している。Ⅲ、Ⅳ層が当遺跡の遺物包含層である。Ⅳ層より下にはⅤ層暗赤褐色（５ＹＲ　３／２）粘質シルト、Ⅵ層暗赤褐色（５ＹＲ　３／２）粘質シルト（御池軽石層への漸移層）と堆積し、その下に御池軽石層（Ⅶ層）が層厚約１ｍで堆積しており、それより下位にはⅧ層黒色粘質シルト、Ⅸ層喜界アカホヤ火山灰層が堆積している。

今回調査したのはⅦ層上面までである。遺物包含層はⅢ層～Ⅳ層であり、それよりも下位からは遺物は検出されなかった。



①黒色粘質シルト（御池軽石をまんべんなく含む）
②黒褐色粘質シルト
③黒褐色の硬化土（貼床）
④黒褐色粘質シルト（炭化物を多く含む）
⑤黒褐色粘質シルト（中央土坑埋土）
⑥黒褐色粘質シルト（中央土坑埋土）
⑦黒褐色粘質シルト（しまっている）
⑧黒褐色砂質シルト（土坑埋土）
⑨黒褐色砂質シルト（⑧層より粘性強い）

第５図　ＳＡ１実測図（Ｓ＝1／80）



第６図　ＳＡ１炭化材検出状況実測図（Ｓ＝1/80）

3　遺構と遺物

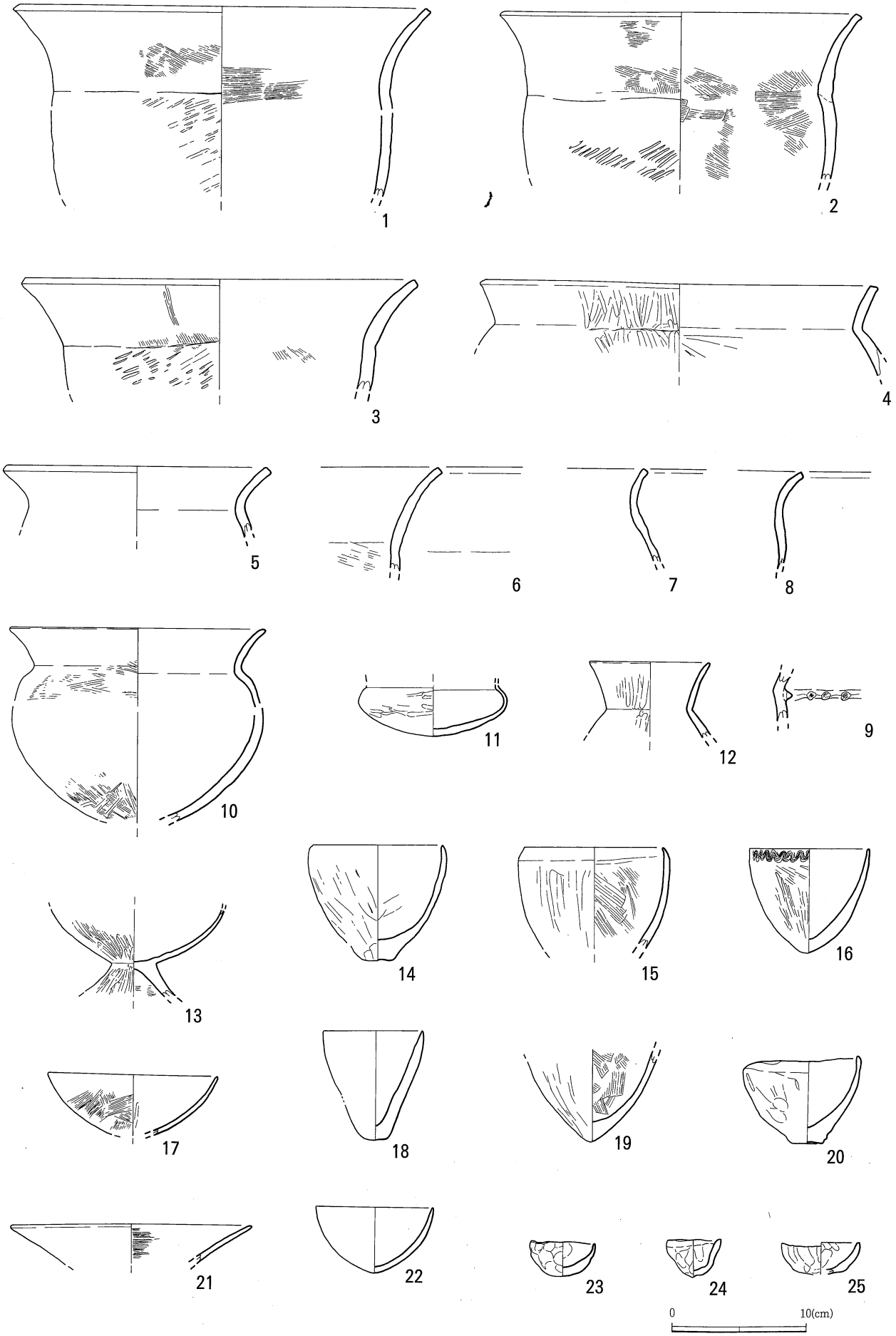
ＳＡ１（第５図）

ＳＡ１は調査区北西隅で検出された。確認調査時に部分的に検出されており、存在は調査開始時から判明していた。プラン検出はⅣ層上面にて行なった。

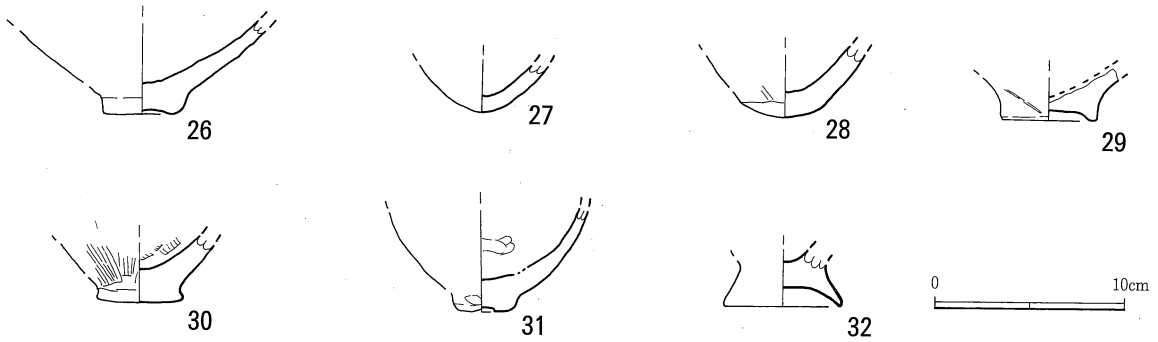
ＳＡ１はやや不整ではあるが方形のプランである。主軸はＮ－４°－Ｗである。長軸は最大で９．９ｍ、短軸が最大で８．５ｍ、床面積は６５．５㎡である。床面の深度は検出面から約０．５～０．６ｍあり、部分的に貼床も認められた。主柱穴は６本であり、長方形の配列をとる。各柱穴の直径は０．３～０．６ｍ、検出面からの深さは０．３２～０．５ｍである。遺構埋土はⅢ層を基本としており、レンズ状に堆積している様子が確認できた。

住居中央には楕円形、不定長方形の土坑が隣接して掘り込まれており、埋土中には炭化物が多量に含まれていた。壁際にも大小の土坑が掘り込まれており、一部柱穴深度より深いものも見られた。中央土坑の周囲は一段高くなっており、不明瞭ながらベッド状遺構を構築している。北西隅では間仕切り施設と思われる突出壁が２ヶ所確認できた。

遺物は床面直上からの出土は少なく、少し浮いたような状態で検出されたものが多数である。他に



第７図　ＳＡ１出土遺物　土器（1）　1/4



第８図　ＳＡ１出土遺物　土器（2）　1/4

はトレンチャーによる撹乱を受けている遺物も多く、元位置を留めないものや細片となったものも多数検出された。壁際の土坑内からは鉢、手捏ね土器が検出された。

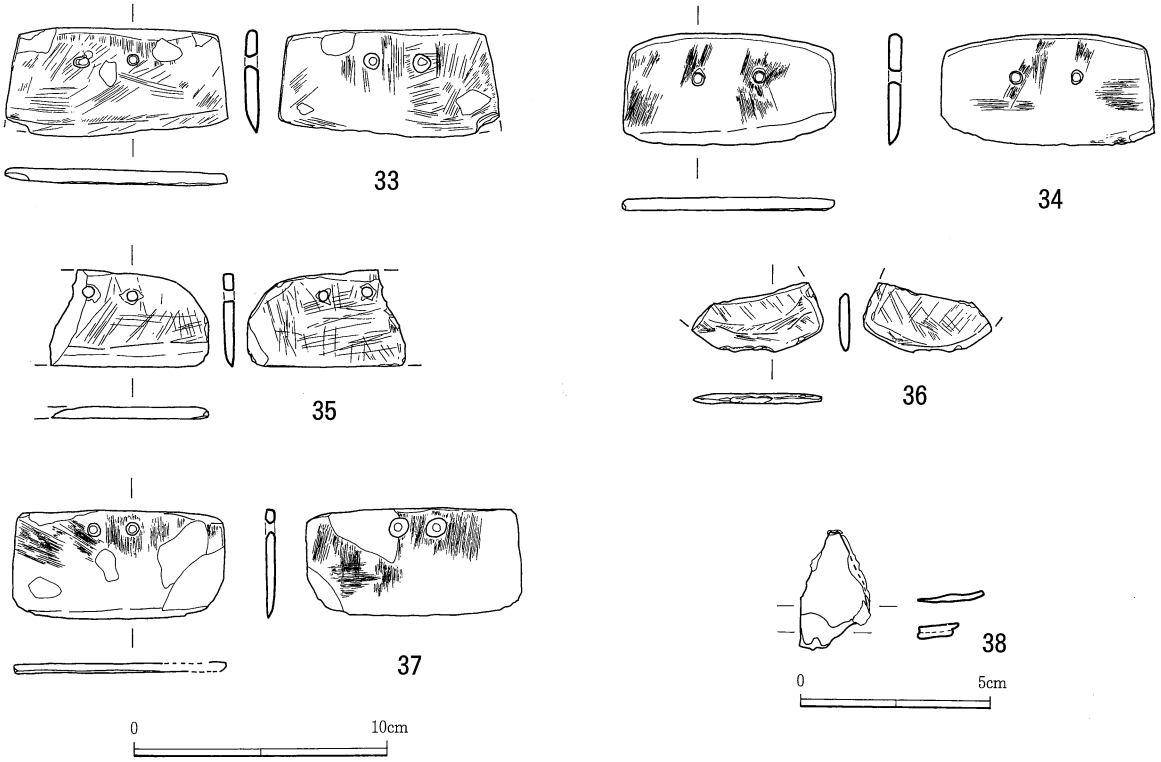
床面付近からは多量の炭化材が検出された（第６図）。トレンチャーによりかなり撹乱を受けていたが、本来は放射状に散在していたものと推測される。付近のトレンチャー撹乱土からもこれに伴う多量の炭化材が検出されており、ＳＡ１は焼失家屋の可能性もある。なお、炭化材の放射性炭素年代測定分析（β線法）の結果、1800 ± 60 年ＢＰ（AD220 ～ 370 年、交点 AD250）、1920 ± 70 年ＢＰ（AD40 ～ 220 年、交点 AD100）の測定値が得られた（第４章参照）。

ＳＡ１出土遺物（第７図～第 11 図）

ＳＡ１からは土器、石器、鉄片が検出された。

1 ～ 9 は甕である。いずれも外反する口縁を持つ。**1** は口縁部が先端に向け先細りしてゆきやや長めに伸びる。口縁端は粗いヨコナデにより面取りされる。胴部外面には左回りのタタキが施される。**2**、**3** も胴部外面調整にタタキが確認できるが、**3** は部分的にタタキ目がナデ消されている。内面には当て具等の痕跡は確認できず、ハケメが残されている。また、ケズリ等も施されておらず器壁は厚い。**4** は胴部がやや膨らむものと考えられる。外面は工具によるナデ調整であるが、ミガキ状の痕を残している。内面は工具によってナデられている。焼成は１～３に比べ堅致である。**5** は小型の甕である。内・外面ともにナデ調整である。**6** は破片であるが１、２と同様のものと思われる。**7** は器壁がやや薄く、胴部はやや張りをもつ。**9** は頸部破片で刻目突帯をもつ。刻目内には布状圧痕が観察できる。

10 は外反する口縁を持つ鉢である。扁球形の胴部を持つ。外面には細かいハケが施される。**11** は直口壷である。床面に張り付くような形で検出された。外面が磨耗しているが、横方向のミガキが認められる。口縁部が欠失しているが、類例を考慮すると直に短く上に立ち上がるものと思われる。器壁は薄く仕上げられており、胎土は他の土器に見られるような鉱物はあまり混入しておらず、精良である。**12** は小型の壷であろうか。外面にミガキが施される。**13** は小型の高坏である。口唇、脚部端が欠失している。坏部は器壁が薄く仕上げられ、外面には細かいミガキが施される。脚部は外面がミガキ、内面にはハケが施される。これも胎土は精良である。**14** は鉢である。外面は工具によるケズリで内面はナデられている。**15** は外面が工具ナデ、内面にはハケが施される。**16** は口縁部に櫛描波状文が施文されている。外面にはミガキが施される。**20** はＳＡ１の土坑内から検出された。調整は器内外面とも指頭によるオサエあるいはナデである。**23 ～ 25** は手捏ね土器である。いずれも指頭によるオサエ調整である。**26 ～ 32** は土器の底部である。**28** は底部で凸レンズ状の平底である。壷底部の可能性がある。**30** は甕底部。ハケメが明瞭に残る。**31** は鉢の底部と考えられる。**32** は甕底部で脚台状を呈する。



第９図　ＳＡ１出土遺物　石器（1）・鉄片　1/3　1/2

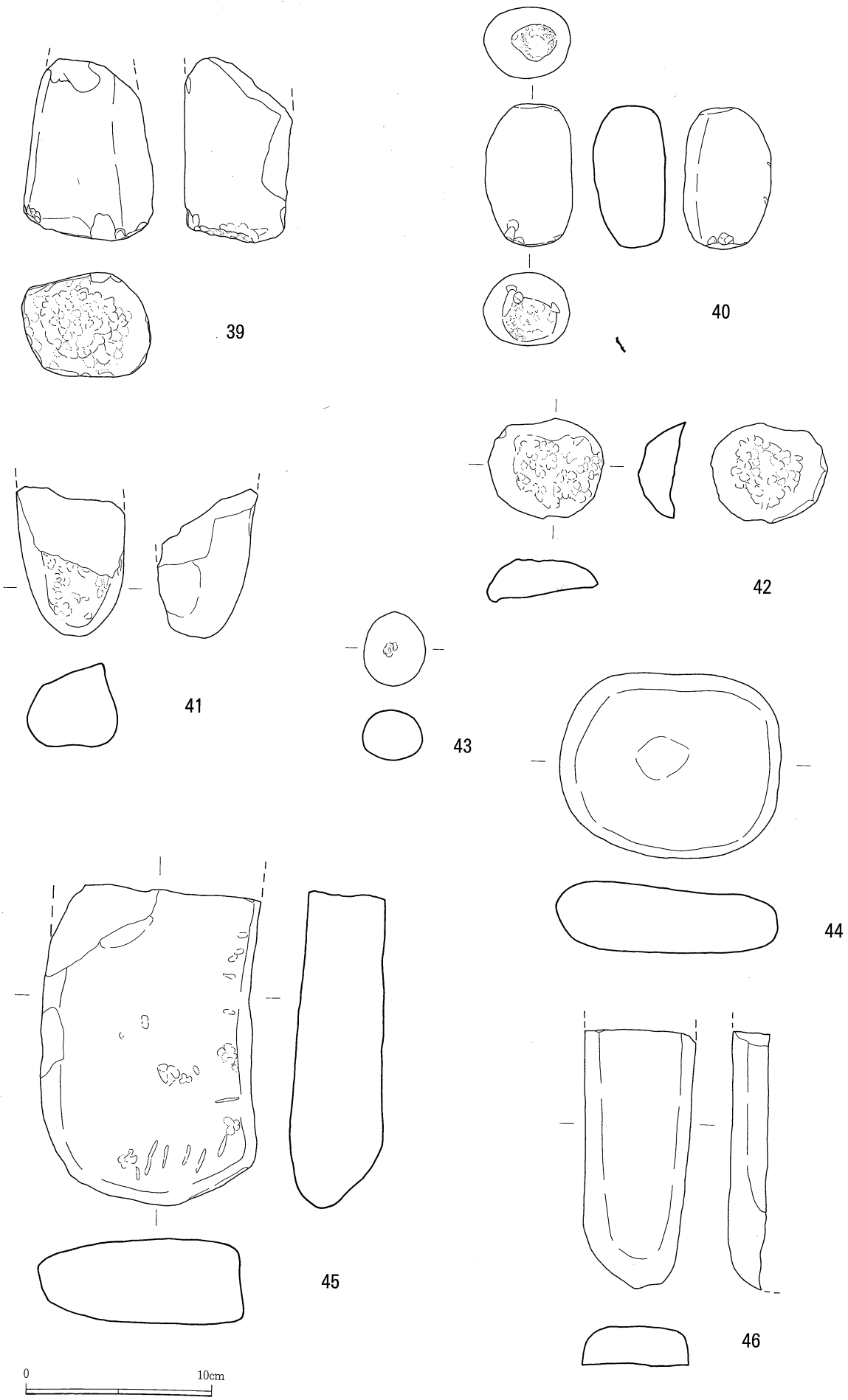
33 は石包丁である。直背直刃形で平面形は長方形である。穿孔が２孔穿っており、紐ずれと思われる痕跡も残っている。長さは 8.8cm、幅 4.2cm、厚さは 0.6cm である。使用石材は頁岩である。**34** は外湾背外湾刃であり、これも紐ずれの痕が確認できる。長さは 8.4cm、幅 4.4cm、厚さ 0.6cm である。使用石材は頁岩である。**35** は外湾背直刃形と思われる。全体の１/３が欠失している。

36 は石包丁の破片である。全体の形状は不明である。**37** は確認調査時に出土したものである。直背直刃形であり、平面形は長方形である。長さ 5.1cm、幅 4.4cm、厚さ 0.4cm である。部分的に剥離しているが全体的な残りは良い。これも石材は頁岩である。

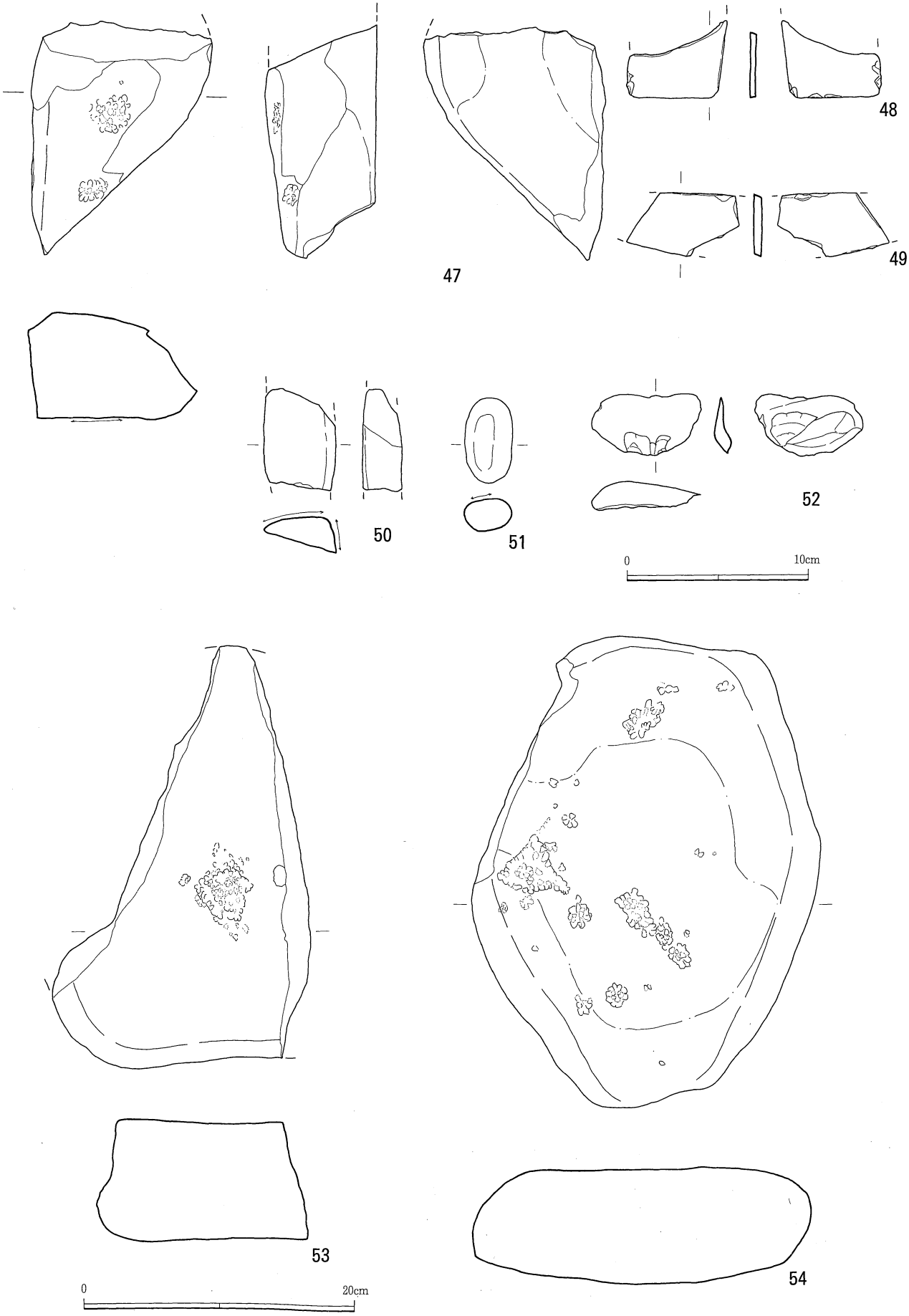
38 は鉄片である。鉋の先端とも捉えうるが確言はできない。下端では２枚の鉄片が重なっている。

39 は敲石である。下端全面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。**40** は確認調査時に出土したものである。上下両端に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。**41** には敲打痕のほかに研磨面も見られ、砥石としても使用されていたようである。**42** は石材剥片を敲石として使用しており、表裏両面に敲打痕が認められる。**44** は凹石である。**45** は台石であるが敲打痕のほか、使用面の側縁には細長い形状の使用痕が認められる。**46** は砥石である。研磨面は２面ある。

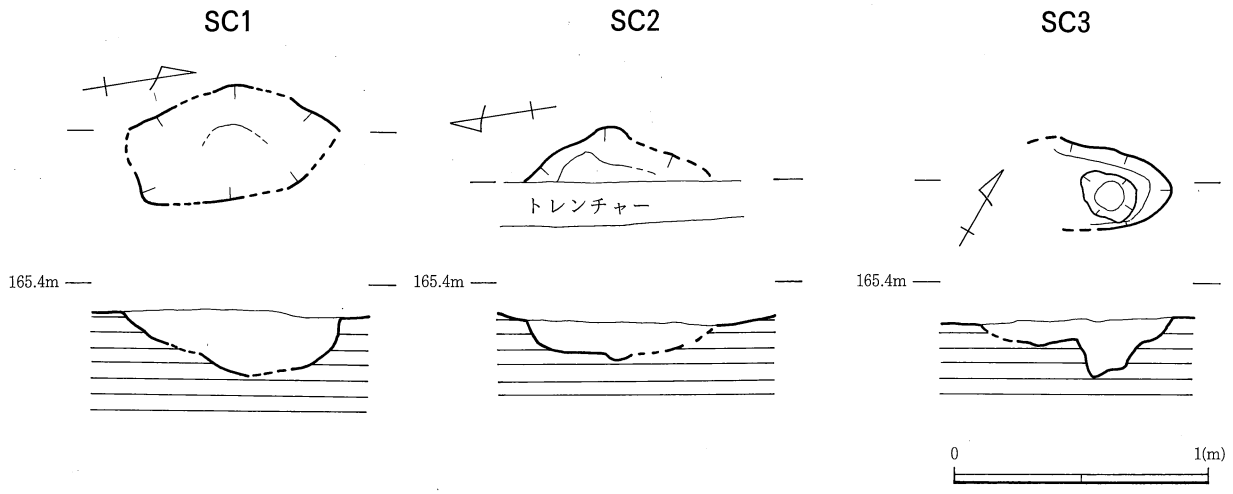
47 は台石兼砥石である。敲打痕を持つ面と研磨面を２面持っている。**48**、**49** は板状砥石である。板状剥片を砥石として使用したものであるが、各側縁には微細な剥離も観察できる。**50** は柱状砥石である。両端は折れて欠失している。**51** は自然の小礫を砥石として使用している。部分的に研磨痕が残る。**52** は剥片石器である。蛤状の剥片に粗い打撃を加え、刃部を作出している。石材は流紋岩を用いている。**53**、**54** は台石である。**53** はトレンチャー内から出土した。全体の２/３ほどが欠失しているが、使用面のほぼ中央に敲打痕が集中している。**54** は使用面の中央及び側縁部付近に敲打痕が集中している。背面にはトレンチャーによる掘削傷が付く。使用石材は砂岩である。



第10図　ＳＡ１出土遺物　石器（2）　1/3



第11図　ＳＡ１出土遺物　石器（3）　1/3　53・54は 1/4



第12図　土坑実測図（S＝1/30）

土坑（第12図）

SC1

A－3区で検出された。トレンチャーにより撹乱されているため確言できないが楕円形のプランと推測される。長軸0.85m、短軸0.45mである。遺構の深度は0.25mと浅い。遺構埋土は黒色粘質土である。遺物は検出されなかった。時期も不明である。

SC2

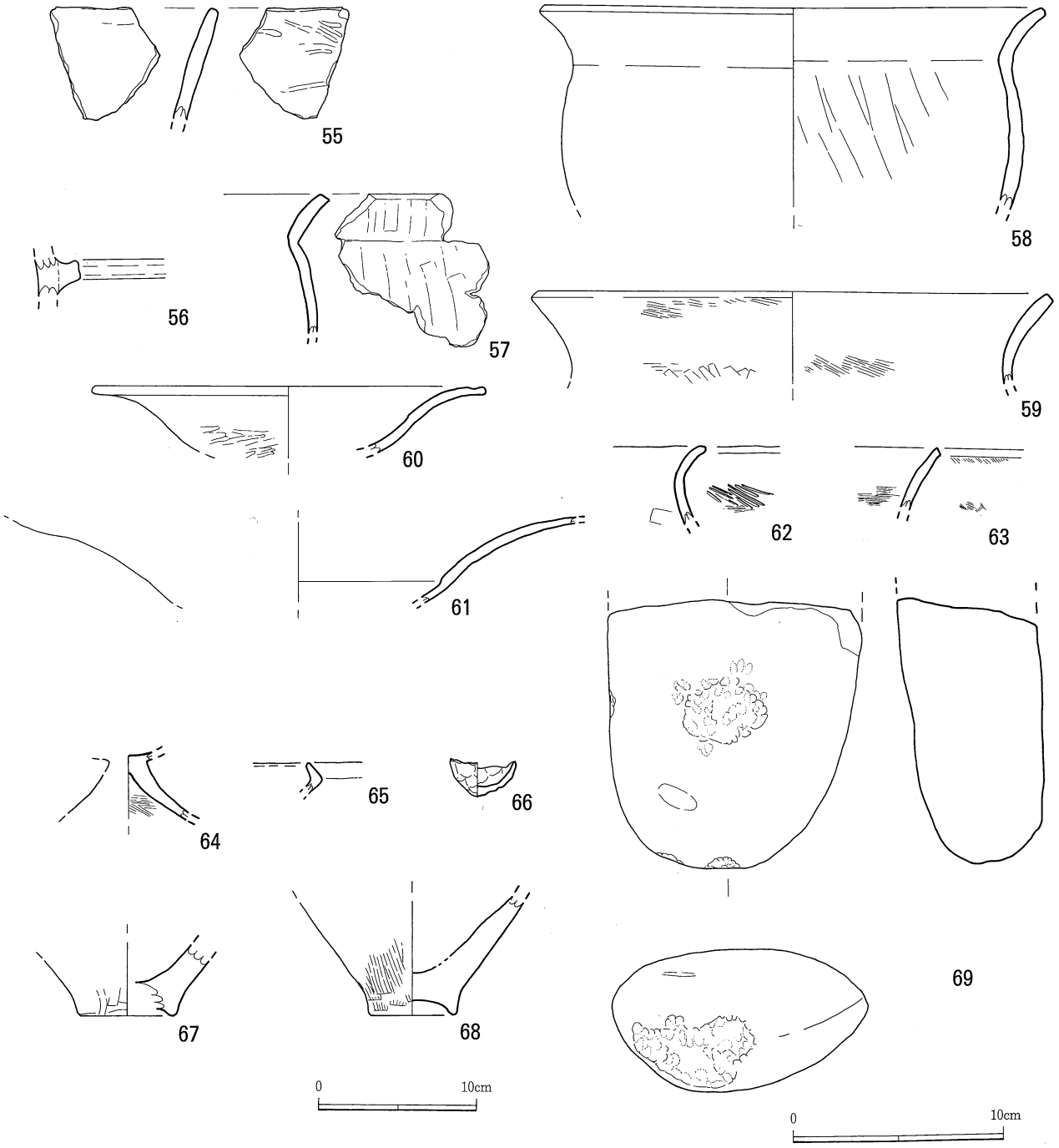
B－3区で検出された。これもトレンチャーによる撹乱を受けておりプランの半分程度は検出できていない。長軸は0.65m＋α、短軸0.2m＋αである。遺構の深度は0.15mと浅い。遺構埋土はSC1と同様、黒色粘質土である。遺物は検出されなかった。

SC3

B－4区で検出された。トレンチャーにより撹乱を受けている。長軸は0.55m＋α、短軸は0.32m＋αである。2段に掘り込みをもち、遺構深度は土坑中央部分で0.4mを測る。遺構埋土はSC1、SC2と同じ黒色粘質土である。遺物は検出されなかった。

4　包含層出土遺物（第13図）

包含層内遺物はⅢ、Ⅳ層をメインに出土したが、一部トレンチャー内から出土した遺物も掲載している。**55**は縄文晩期の深鉢の口縁部である。外面には横方向ミガキが部分的に残る。**56**は弥生中期～後期の大甕の突帯部分である。胎土に金雲母を含有する。**57～59**は甕である。いずれも工具によるナデ調整が施される。**58**は全体的に器面が風化している。**60**は高坏である。外面には横方向ミガキが施される。**61**は口縁部が大きく開くものである。磨耗しているため器面調整は不明である。**62**は甕の口縁～胴部でタタキが施される。**64**は小型の高坏で脚部のつくりなどから13と同様のものと



第13図　包含層出土遺物　1/4　69は 1/3

考えられる。**65** は二重口縁壷の口縁端部である。全体的に磨耗している。口縁外面における櫛描波状文等の施文は見られない。**66** は手捏ね土器である。**67**、**68** は甕の底部である。**68** はハケが施される。**69** は敲石（台石）である。折れて欠失しているが、正面、下面に敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

第１表　向原第２遺跡遺物観察表（土器）

No.	出土区	層	器種(器形)	色調	調整	胎土	法量	備考
1	SA1	②	甕	内面:灰黄(2.5YR7/2) 外面:浅黄橙(7.5YR7/2)	内面:工具ナデ 外面:タタキ	2mm以下鉱物	口径－31.2cm	
2	SA1	②	甕	内面:にぶい橙(5YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:ハケ 外面:タタキ	6mm以下鉱物	口径－27.0cm	
3	SA1	②	甕	内面:にぶい橙(5YR7/4) 外面:淡赤橙(2.5YR7/4)	内面:ナデ 外面:タタキ	3mm以下鉱物	口径－29.4cm	
4	SA1	②	甕	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(10YR8/4)	内面:ナデ 外面:工具ナデ	3mm以下鉱物	口径－29.6cm	
5	SA1	②	甕	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(7.5YR8/6)	内面:ナデ 外面:ナデ	—	口径－20.0cm	
6	SA1	②	甕	内面:橙(5YR7/6) 外面:橙(5YR7/6)	内面:風化の為不明 外面:ハケ	5mm以下鉱物	—	
7	SA1	②	甕	内面:浅黄橙(7.5YR8/4) 外面:浅黄橙(7.5YR8/4)	内面:風化の為不明 外面:風化の為不明	5mm以下鉱物	—	
8	SA1	②	甕	内面:浅黄橙(10YR8/3) 外面:浅黄橙(10YR8/3)	内面:風化の為不明 外面:風化の為不明	5mm以下鉱物	—	
9	SA1	②	甕	内面:浅黄橙(7.5YR8/4) 外面:橙(5YR7/6)	内面:— 外面:—	3mm以下鉱物	—	刻目突帯
10	SA1	②	鉢	内面:にぶい黄橙(10YR8/3) 外面:にぶい黄橙(10YR8/3)	内面:ナデ 外面:ハケ	2mm以下鉱物	口径－19.0cm 胴径－18.6cm	
11	SA1	②	直口壷	内面:にぶい橙(7.5YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:ケズリ・ナデ 外面:ミガキ	2mm以下鉱物	胴径－11.2cm	
12	SA1	②	直口壷	内面:にぶい黄橙(10YR7/4) 外面:浅黄橙(7.5YR8/4)	内面:ナデ 外面:ミガキ	1.5mm以下鉱物	口径－9.0cm	
13	SA1	②	高坏	内面:— 外面:にぶい橙(5YR7/6)	内面:ミガキ 外面:ミガキ	1.5mm以下鉱物	—	
14	SA1	②	鉢	内面:にぶい黄橙(10YR7/3) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:ケズリ 外面:ナデ	3mm以下鉱物	口径－9.6cm	
15	SA1	②	鉢	内面:にぶい橙(7.5YR7/4) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:ハケ 外面:ナデ	極微小の鉱物	口径－10.4cm	
16	SA1	②	鉢	内面:褐灰(10YR5/1) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:ナデ 外面:ミガキ	極微小の鉱物	口径－9.0cm	櫛描波状文
17	SA1	②	高坏	内面:灰白(10YR8/1) 外面:灰白(10YR8/2)	内面:ミガキ 外面:ハケ	極微小の鉱物	口径－12.8cm	
18	SA1土坑	④	鉢	内面:橙(7.5YR7/6) 外面:橙(7.5YR7/6)	内面:ナデ 外面:ナデ	2mm以下鉱物	口径－7.5cm	
19	SA1	⑤	鉢	内面:にぶい黄橙(10YR7/3) 外面:にぶい黄橙(10YR7/3)	内面:ハケ 外面:工具ナデ	1.5mm以下鉱物	—	
20	SA1土坑	⑧	鉢	内面:にぶい黄橙(10YR7/4) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:オサエ 外面:ナデ	3mm以下鉱物	口径－7.5cm	
21	SA1	⑦	高坏	内面:浅黄橙(7.5YR8/6) 外面:浅黄橙(7.5YR8/6)	内面:ハケ 外面:ナデ	極微小の鉱物	口径－8.8cm	
22	SA1	⑧	鉢	内面:橙(7.5YR6/6) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:ナデ 外面:ナデ	微小の鉱物	口径－8.8cm	
23	SA1	②	手捏ね	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(10YR8/4)	内面:オサエ 外面:オサエ	2mm以下鉱物	口径－4.9cm	
24	SA1土坑	⑨	手捏ね	内面:淡黄(2.5Y8/3) 外面:淡黄(2.5Y8/3)	内面:オサエ 外面:オサエ	2mm以下鉱物	口径－3.6cm	
25	SA1	—	手捏ね	内面:にぶい黄橙(10YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:オサエ 外面:オサエ	2mm以下鉱物	口径－5.9cm	
26	SA1	②	甕	内面:にぶい橙(7.5YR7/4) 外面:浅黄橙(7.5YR8/4)	内面:風化の為不明 外面:風化の為不明	3mm以下鉱物	底径－4.9cm	
27	SA1土坑	⑨	鉢	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(10YR8/4)	内面:ナデ 外面:ナデ	2mm以下鉱物	—	
28	SA1	②	底部	内面:浅黄橙(10YR8/3) 外面:浅黄橙(7.5YR8/3)	内面:風化の為不明 外面:工具ナデ	3mm以下鉱物	—	壷の可能性
29	SA1	②	甕	内面:— 外面:浅黄橙(10YR8/4)	内面:風化の為不明 外面:工具ナデ	極微小の鉱物	底径－4.5cm	
30	SA1	②	甕	内面:にぶい橙(7.5YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:ハケ 外面:ハケ	極微小の鉱物	底径－4.6cm	
31	SA1	②	鉢	内面:浅黄橙(10YR8/3) 外面:灰白(10YR8/2)	内面:ナデ 外面:ナデ	2mm以下鉱物	底径－2.9cm	
32	SA1	②	甕	内面:にぶい黄橙(10YR7/4) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:ナデ 外面:ナデ	3mm以下鉱物	底径－6.0cm	
55	B－2	Ⅳ	深鉢	内面:にぶい褐(7.5YR6/4) 外面:褐(7.5YR4/3)	内面:ナデ 外面:ミガキ	3mm以下鉱物	—	縄文晩期・粗製

No.	出土区	層	器種(器形)	色調	調整	胎土	法量	備考
56	B－3	Ⅰ層 トレンチャー	大甕	内面:橙(7.5YR7/6) 外面:にぶい黄橙(10YR7/4)	内面:— 外面:ナデ	2mm以下鉱物 金雲母含む	—	弥生中期
57	B－3	Ⅲ	甕	内面:浅黄橙(7.5YR8/4) 外面:浅黄橙(7.5YR8/4)	内面:ナデ 外面:工具ナデ	5mm以下鉱物	—	
58	A－3	Ⅲ	甕	内面:にぶい黄橙(10YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR)	内面:工具ナデ 外面:風化の為不明	4mm以下鉱物	口径－31.4cm	
59	A－3	Ⅲ	甕	内面:にぶい橙(7.5YR7/4) 外面:にぶい橙(7.5YR7/4)	内面:ハケ 外面:工具ナデ	4mm以下鉱物	口径－32.2cm	
60	B－2	Ⅳ	高坏	内面:橙(7.5YR7/6) 外面:橙(7.5YR7/6)	内面:ナデ 外面:ミガキ	3mm以下鉱物	口径－24.5cm	
61	A－3	Ⅲ	高坏	内面:橙(7.5YR7/6) 外面:橙(7.5YR7/6)	内面:風化の為不明 外面:風化の為不明	2mm以下鉱物	—	
62	A－4	Ⅲ	甕	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(10YR8/4)	内面:ナデ 外面:タタキ	3mm以下鉱物	—	
63	A－3	Ⅲ	甕	内面:浅黄橙(10YR8/4) 外面:浅黄橙(10YR8/3)	内面:ハケ 外面:ナデ	2mm以下鉱物	—	
64	B－4	Ⅲ	高坏	内面:浅黄橙(10YR8/3) 外面:浅黄橙(10YR8/3)	内面:ハケ 外面:ナデ	極微小鉱物	—	
65	A－4	Ⅲ	壷	内面:浅黄橙(10YR8/3) 外面:浅黄橙(10YR8/3)	内面:風化の為不明 外面:風化の為不明	2mm以下鉱物	—	
66	A－3	Ⅲ	手捏ね	内面:にぶい黄橙(10YR6/3) 外面:にぶい黄橙(10YR6/3)	内面:オサエ 外面:オサエ	極微小鉱物	口径－4.1cm	
67	A－3	Ⅲ	甕	内面:にぶい褐(7.5YR6/3) 外面:にぶい橙(7.5YR7/3)	内面:ナデ 外面:ハケ	3mm以下鉱物	底径－5.8cm	
68	B－3	Ⅲ	甕	内面:褐灰(10YR6/1) 外面:にぶい黄橙(10YR7/3)	内面:ナデ 外面:ハケ	3mm以下鉱物	底径－5.2cm	

第2表　向原第2遺跡遺物観察表(石器)

No.	出土区	出土層	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
33	SA1	②	石包丁	8.8	4.2	0.6	32	頁岩	
34	SA1	④	石包丁	8.4	4.4	0.6	40	頁岩	
35	SA1	②	石包丁	6.2	3.8	0.4	11	頁岩	
36	SA1	Ⅰ トレンチャー	石包丁	5.1	2.4	0.4	5	頁岩	
37	SA1	—	石包丁	8.4	4.4	0.4	250	頁岩	確認調査時に検出
39	SA1	②	敲石	9.8	7	5.6	541	砂岩	
40	SA1	—	敲石	7.5	4.6	3.9	200	砂岩	確認調査時に検出
41	SA1	②	敲石(砥石)	7.9	5.9	4.5	241	砂岩	
42	SA1	②	敲石	5.4	6.3	1.9	82	砂岩	剥片利用
43	SA1	②	敲石	4.0	3.2	2.7	42	砂岩	
44	SA1	④	台石	9.8	11.8	3.7	670	砂岩	
45	SA1	④	台石	16.9	11.3	5.0	1,688	砂岩	
46	SA1	②	砥石	13.8	5.8	2.2	315	砂岩	
47	SA1	④	台石(砥石)	12.9	9.8	5.9	812	砂岩	
48	SA1	②	板状砥石	4.3	5.6	0.4	8	砂岩	
49	SA1	Ⅰ トレンチャー	板状砥石	3.5	6.1	0.5	12	砂岩	
50	SA1	②	砥石	4.7	2.7	1.8	30	砂岩	
51	SA1	②	砥石	5.6	4.0	2.1	51	砂岩	
52	SA1	④	剥片石器	3.4	6.0	1.5	18	流紋岩	
53	SA1	Ⅰ トレンチャー	台石	31.3	19.0	9.1	6,800	砂岩	
54	SA1	②	台石	34.9	25.4	8.5	11,800	砂岩	
69	B－4	Ⅲ	台石(敲石)	12.6	11.9	6.7	1,370	砂岩	

第4章　自然科学分析

都城市、向原遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SA1，MⅡ層，No.271	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric
No.2	SA1，MⅡ層，No.267	炭化材	酸－アルカリ－酸洗浄，ベンゼン合成	Radiometric

Radiometric：液体シンチレーションカウンタによるβ（ベータ）線計数法

2．測定結果

試料名	測定No. (Beta－)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦） （1σ:68%確率，2σ:95%確率）
No.1	209818	1800±60	－26.9	1760±60	交点：cal AD 250 1σ：cal AD 220～370 2σ：cal AD 120～410
No.2	209819	1920±70	－26.2	1900±70	交点：cal AD 100 1σ：cal AD 40～220 2σ：cal BC 40～AD 250

（1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（2）δ（デルタ）^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

（3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を－25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

（4）**暦年代**

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。cal は **calibration** した年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ（シグマ）（68%確率）と 2 σ（95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

3．所見

放射性炭素年代測定の結果、No. 1 の炭化材では 1760 ± 60 年 BP（1 σ の暦年代で AD220 ～ 370 年）、No. 2 の炭化材では 1900 ± 70 年 BP（同 AD40 ～ 220 年）の年代値が得られた。

【文献】

Stuiver et al.（1998）, INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

第５章　まとめ

最後に第１次調査時の成果とも重ねながら、本調査の成果についてまとめておく。

まず、ＳＡ１出土遺物の帰属時期についてであるが、土器様相は第１次調査時のものと同様の特徴を示す。タタキを施す甕や精製器種(直口壷や小型高坏)は第１次調査時に検出されたものと同じ形態、属性を具備しており、似通った様相を呈している。ちなみにタタキが施されている甕は内面へのケズリ等は施されておらず、ハケ調整のみで器壁は薄く仕上がってはいない。タタキ甕の類似度から見れば、松永幸寿氏が行なった宮崎平野部の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年（松永 2001）の５～６期（庄内式期）に併行するものと思われる。

小型精製器種も特徴的なものが検出された。**11** のような直口壷は類似品が第１次調査のＳＡ３でも検出されている。吉本正典氏はこの器種に対して古墳時代初頭のメルクマールとなる可能性を示唆している（吉本 1993)。以上のことから、先の松永氏の編年案と兼ね合わせてもＳＡ１には古墳時代初頭（庄内式併行期）の年代が付与でき、１次調査時検出の土器群との時間的齟齬もないものと捉えうる。

ＳＡ１は当該期の都城盆地における事例中でも大型のクラスであり、第１次調査時検出の住居と比較しても規模は一番大きい。都城盆地におけるこの時期の住居には間仕切りの突出壁を持つものが多く、１次調査時のＳＡ２でも確認でき、他に祝吉第２遺跡（面高 1982)、前畑遺跡（重山・東（編）1996）等でも確認されている。本調査のＳＡ１も突出壁が２ヶ所確認できた。宮崎平野部における同時期の住居は方形プランを採用しているものが多く、突出壁を持たない。この時期においては違いが見られる。同じくＳＡ１の特徴として、住居跡の立ち上がり壁際に大小の土坑を多く掘り込むことが挙げられる。第１次調査時に検出されたＳＡ１、ＳＡ２も同様であり、壁際に土坑が多数掘り込まれている。同時期の住居でも壁際に土坑を掘り込む事例は幾つも見られる（祝吉第２、前畑等)。具体的な使用形態については不明であるが、本調査では土坑内から小型鉢や手捏ね土器が検出された（第８図 **18**、**20**、**24**)。

他に特筆すべきとしてはＳＡ１内から５点の石包丁が検出されたことが挙げられる。いずれも磨製であり、使用石材は頁岩である。同時期に宮崎平野部では抉入石包丁や打製石包丁が卓越しており、主流をなしている（池畑 1988)。この抉入石包丁であるが都城盆地ではほとんど見られず、磨製石包丁が圧倒的である。１次調査時に検出された石包丁も磨製である。ＳＡ１内からは他にも砥石や敲石、台石等の各種石器も検出されており、この期における石器組成の１セットとして捉えることができる。

ＳＡ１出土炭化材の ^{14}C 年代測定からは幅のある２つの測定結果が得られた（第４章参照)。従前の土器相対年代も考慮し、安易にこの結果を用いることはここでは避け、データの提示のみに留めておく。

本調査で検出されたＳＡ１は、第１次調査時に検出された集落に帰属するものであり、集落が東方向へと広がりをもつことが明らかとなった。集落は単純計算で南北方向に最短で約１００ｍ、東西方向には約３００ｍの範囲で展開していたと推測される。都城盆地における同時期の遺跡には丸谷第１遺跡（宮崎県教育委員会（編）1979)、牟田ノ上遺跡（桒畑 1991)、前畑遺跡、山ノ田第１遺跡（日高ほか 1996）などがある。いずれも向原第２遺跡と同様、河川段丘面上に立地し、遺物組成も同じ様相を呈している。

宮崎平野部の同時期遺跡（松永編年５・６期）には下那珂遺跡（甲斐 2004）や大戸ノ口第２遺跡（岩永・戸高（編）1991)、前ノ田村上第１遺跡（河野 2005）などがあり、本遺跡と土器相が似通っている。ただ器種間の属性レベルにおいては相違点も見られ、例えば向原第２遺跡（第１次調査）では甕でプロポーションは他のものと同一でありながら、頸部に刻目突帯を付すものが一定量存在する。このタイプは平野部でも散見されるものの主体とはなっていない。祝吉第２や前畑でも刻目突帯甕がほとんど存在しておらず様相は一様とは言えないが、刻目突帯を持つ甕は以後古墳時代において都城盆地で主体的に用いられており、その系統の推移を巡っては今後とも注意が必要である。また、先に挙げた精製の直口壷も南九州内陸部における特徴的な器種であり（吉本前掲)、宮崎平野部での出土はあま

りないようである。このような組成の違いは当地域の土器が宮崎平野部と比して共通する要素、加久藤盆地や人吉盆地等の南九州内陸部と共通する要素の両要素を併せ持つことに起因していると考えられる。このことは両地域の土器編年を相互に検討してゆく上でクロスデーティングできる可能性があり、今後検討すべき課題であるといえる。

また、土器以外にも石器組成、鉄器の使用形態等も未だ不明点が多く、今後はこれらの検討も必要となってこよう。

【引用・参考文献】

池畑　耕一　1988「瀬戸内系遺物の出土とその背景」『考古学と関連科学』 鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会

石川　悦雄　1984「宮崎平野部における弥生土器編年試案―素描―（Mk.2）」『宮崎考古』第9号　宮崎考古学会

石川　悦雄　1990「弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器編年にむけて―予察1　高坏―」『宮崎県総合博物館研究紀要』15　宮崎県総合博物館

石川　悦雄　1991「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』5　宮崎県

岩永　哲夫・戸高　真知子（編）　1991『大戸ノ口第2遺跡』高鍋町文化財調査報告書第5集　高鍋町教育委員会

面高　哲郎　1982『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第2集　都城市教育委員会

甲斐　貴充　2004『下那珂遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第90集　宮崎県埋蔵文化財センター

河野　康男　2005『前ノ田村上第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財発掘調査報告書第116集　宮崎県埋蔵文化財センター

桒畑　光博　1990「向原第1・2遺跡」『平成元年度遺跡発掘調査報告』都城市文化財調査報告書第11集　都城市教育委員会

桒畑　光博　1991「牟田ノ上遺跡」『平成2年度　遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集　都城市教育委員会

桒畑　光博　1996『加治屋遺跡2』都城市文化財調査報告書第35集　都城市教育委員会

重山　郁子・東　憲章（編）　1996『中大五郎第1遺跡　中大五郎第2遺跡　本池遺跡　前畑遺跡』都城市文化財調査報告書第34集　都城市教育委員会

壇　佳克　2004「人吉盆地における古墳時代の土器編年について―系統的視点からみた併行関係の再検討―」『熊本古墳研究』第2号　熊本古墳研究会

日高　広人ほか　1996『山ノ田第1遺跡』 宮崎県教育委員会

松永　幸寿　2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第17号　宮崎考古学会

宮崎県教育委員会（編）　1979『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』 宮崎県教育委員会

吉本　正典　1993「日向の庄内式併行期の土器」『考古学ジャーナル』363　ニューサイエンス社

図版1・遺構

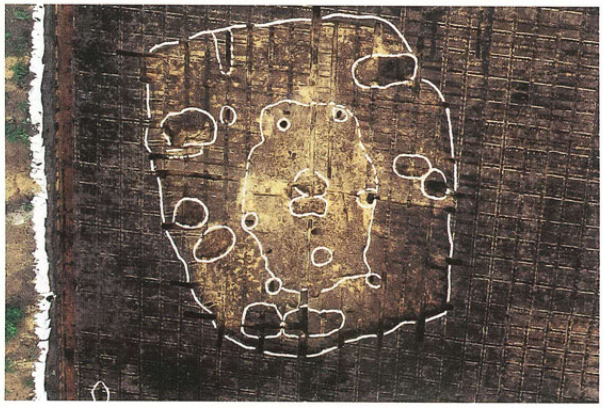
SA1　遺物検出状況

包含層遺物出土状況

SA1　炭化材検出状況

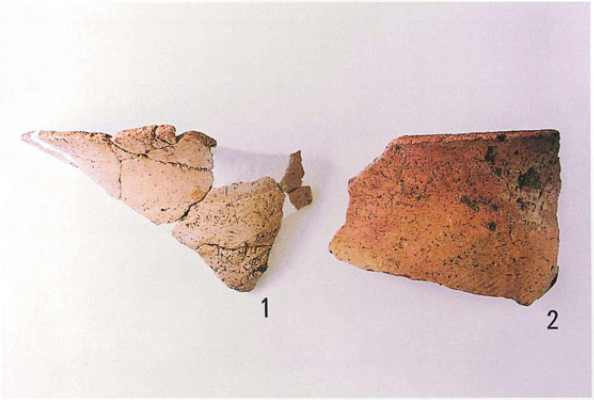
SA1　土坑内鉢(20)出土状況

SA1　石包丁(39)出土状況

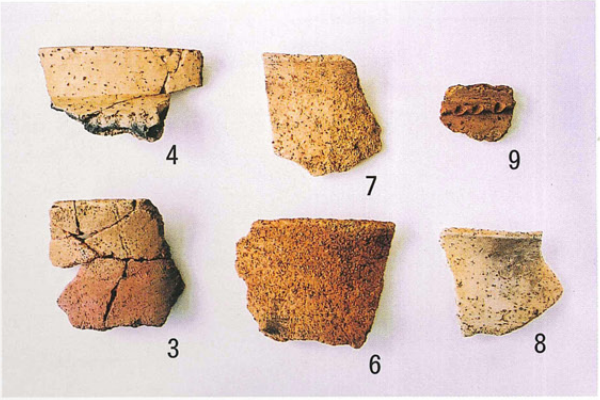


SA1　完堀状況

SC1　断面

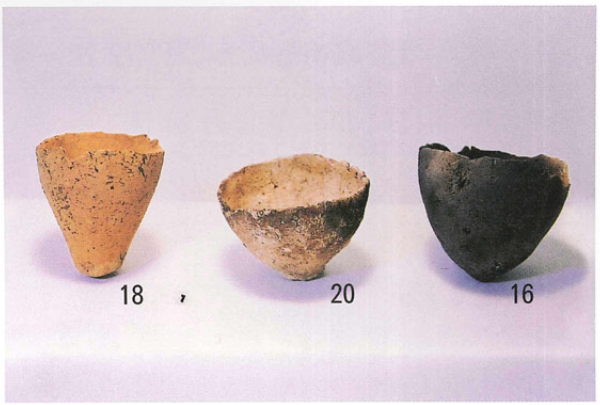


SA1　出土土器(1)

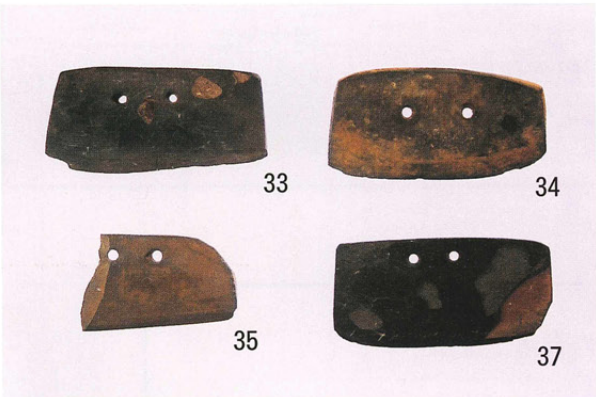


SA1　出土土器(2)

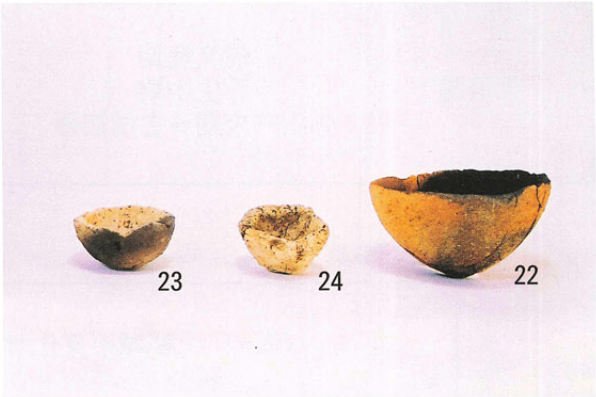
SA1　出土土器(3)



SA1　出土土器(4)

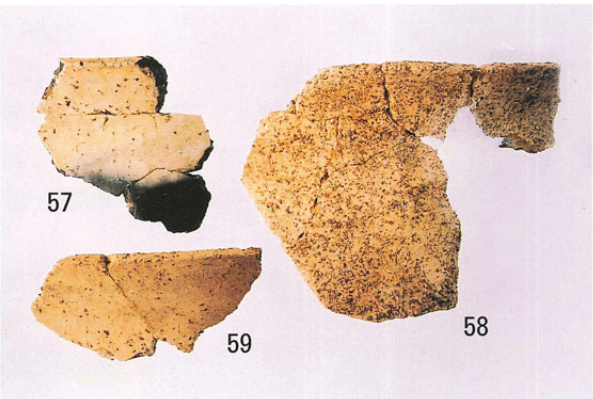


SA1　出土石器(1)



SA1　出土土器(5)

SA1　出土石器(2)



包含層出土土器

報告書抄録

書名	向原第2遺跡 －第2次調査－
副書名	民間開発―遊技場建設―に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	加覧　淳一
編集機関	宮崎県都城市教育委員会
所在地	宮崎県都城市菖蒲原19－1　都城市役所菖蒲原別館
発行年月日	2006年10月31日

所収遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
向原（むこうばる）第2遺跡（第2次調査）	宮崎県都城市立野町字向原	31° 42′ 23″ 付近	131° 6′ 5″ 付近	2005年4月20日～2005年6月28日	約600㎡	遊技場建設

種別	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	縄文晩期 弥生中期 弥生終末期～古墳初頭	竪穴住居 土坑	縄文土器 弥生土器 石器 鉄片	住居跡から炭化材

都城市文化財調査報告書第75集

向原第2遺跡 －第2次調査－

2006年10月31日

編集　宮崎県都城市教育委員会　文化財課
発行　〒885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町19－1
TEL（0986）23－9547　FAX（0986）23－9549

印刷　株式会社　文昌堂
〒885-0052　宮崎県都城市東町18街区1号
TEL（0986）22－1121　FAX（0986）25－6408